



被災者と共に

東日本大震災報道・岩手の地元紙として

岩手日報社編集局 報道部 次長 太田代 剛

保冷車や消防車が重なり道路をふさぐ中被災した自宅などに向かう市民
= 3月12日 釜石市大町
(写真は全て岩手日報社提供)



太田代 剛 おおたしろ たけし
岩手県花巻市生まれ。日本大学芸術学部卒業。1996年岩手日報社入社。報道部県警担当、写真部、二戸支局、運動部、陸前高田支局長、報道部県政担当などを経て2011年3月11日から報道部災害担当デスクを務める。

現場 *Documentary Report*
eye
第1回

「離れて暮らす娘に、私は無事だと伝えてほしい」

3月12日、陸前高田市の避難所で一人の記者が被災者から託された言葉に、未曾有の大災害でわれわれ地元紙が果たすべき役割の全てが詰まっていた。

東日本大震災で、岩手県沿岸部の市町村は壊滅的な打撃を受けた。死者、行方不明者が恐ろしい勢いで増え続ける一方で、携帯電話やメールなどの通信網や交通網はずたずたに寸断された。

われわれ新聞社もインターネット回線を使った記事送信が不可能となり、記者は写真と記事を本社に届けるため、毎日往復5時間かけて沿岸被災地と盛岡市を往復していた。

一方、地震直後に震災担当デスクに任命された私は、前例のない大災害の前に、地元紙として誰に何を伝えるべきか、判断がつかず

また、自社の輪転機は停電で動かず、印刷は災害協定を結んでいる青森市の東奥日報社に委託せざるを得なくなった。発行できる紙面はわずか4ページに限定された。全体像すらつかめない情報の洪水の中で、読者に伝えられる情報はごくわずか。明確な理念に基づいた取捨選択を迫られていた。

だが、思考は空回りした。沿岸部では弊社の支局も被災し、陸前高田、大船渡、金石各市の記者が安否不明となっていた。集中しようとするほど、彼らへの思いがこみ上げ、胸を押しつぶし、頭を混乱させた。

当時、編集局内には多様な意見があった。「大きな写真で被害の巨大さを伝える、ダイナミックな紙面」か。それとも「未曾有の大災害の姿を克明に将来に残す『記録』としての紙面」か――。

声を荒らげた激論が交わされ、混乱を極めたその時だった。陸前



津波は瞬間に街をなめ尽くし足下に迫ってきた
= 3月11日午後3時30分
陸前高田市気仙町の泉増寺から陸前高田支局・鈴木多聞撮影



「ありがとな、ハジ」
涙を流し、愛犬との別れを惜しむ男性
避難所で犬は飼えない
= 4月7日 釜石市市民交流センター



声を合わせて漁船を陸に引き上げる漁師たち
再建を目指し一歩一歩前へ進む
= 3月30日 宮古市・音部漁港



津波に流されずに残った
防潮堤に手作り看板を
設置した崎浜地区の子どもたち
= 4月10日 大船渡市三陸町越喜来



防潮堤を乗り越えて市街地を襲う「黒い波」
車がマッシュ箱のように流される
= 宮古市新川街の市役所6階から 宮古支局 熊谷真也撮影

記者が避難所で撮影した避難者名簿
メモリーカードを本社に持ち帰り
運動や学芸担当などの記者が朝から
晩まで打ち込み続けた



「今、一番大切なのは命です」

高田市の避難所から戻った記者が、泥だらけの顔で私に報告した。
「被災者が、避難所の壁に張られた名簿で、必死に家族を捜している」「取材相手から『離れて暮らす家族に自分の無事を伝えてくれ』と、必ず頼まれる」

最近子どもが生まれたばかりの若き記者の目が、必死に訴えていた。その通りだった。私自身、破壊され尽くされたまちなみに対する絶望よりも、同僚たちの命を心配する気持ちの方が、はるかに大きかった。

翌13日から、岩手日報社は当時投入可能な全ての記者を被災地に派遣し、「避難者名簿」の取材をはじめた。

記者は、がれきをかき分けて避難所を回り、壁に貼ってある名簿を書き写したり、デジタルカメラで撮影したり、一人一人聞き回ったりして、

生存者の名前をかき集めた。

集めた名簿は、運動部や学芸部の記者たちのほか、記者経験のある総務や営業の社員も動員して、朝から晩までパソコンに打ち込み続けた。

彼らはずっと本社で机に向かっていたが、現場を駆けずりまわった記者と同じく、被災地の命に正面から向き合い続けた。掲載した避難者の氏名は、合計約5万人分になった。

結果的に岩手日報の災害報道は、ほかの報道各社とは多少異なるものになった。限られた紙面の中で、津波に破壊し尽くされたまちなみや、悲しみに暮れる被災者の生々しい写真や記事は、他社に比べ少なかったかも知れない。

一方、「避難者名簿」のほか、食料や水などの在りかを詳報した「生活情報」等の活字情報は、どこよりも充実していたと自負している。避難所では、それらの紙面を食いつくすように見つめる被災者が数

多く見られた。記者は、くしゃくしゃになってもまだ回し読みされ続けている新聞を励みに、取材を続けた。

避難者名簿は弊社のホームページ（HP）にも掲載したが、ツイッターやフェイスブックなどで全国に情報が広まり、アクセスが殺到。サーバーがダウンし、急ぎよ全国の地方新聞社と共同通信社の総合サイト「47ニュース」や、全国の地方紙などのHPにコピーを掲載してもらった。

新聞記者になりたてのころ、今は亡き当時のデスクから

「答えは必ず現場にある」

と散々言い聞かされた。単純な交通事故や火災の現場に何度も通わされ、被害者の家族や近所の人たちの声まで取材させられた。

ただか30行程度の記事になぜそこまでしなければならぬのかよく分からなかったが、十数年たった今、やっと答えを見つけた気

寒さに耐えながら夜を明かす被災者
= 3月12日夜
陸前高田市の第一体育館



がする。

岩手日報は岩手の地元紙だ。東京から大挙して訪れて取材合戦を繰り広げ、大方の興味をうせると撤退していく大手メディアとは役割が異なる。

私たちはいま、被災直後と2カ月後に続いて、3度目の「避難者500人アンケート」を行っている。若手を中心にできる限りの記者を被災地に派遣し、被災者一人一人の声を聞いて回っている。

避難所から仮設住宅に移った被災者は、全国から届く支援物資に頼る生活を卒業し、自ら新たな家を建て、漁業を始めとする産業を立て直し、自立しようと精いっぱい頑張っている。

一方、浸水した土地の建築制限区域の早期策定など、復興に向けた課題は山積している。

私たちは被災地が真の復興を成し遂げるその日まで、被災者に寄り添い、ともに歩み続ける報道を続けたい。